

歴史認識を巡る葛藤を越えて —記憶 vs. 事実の検証と日本の役割—

伊藤 英一*

- 1、『愛人』の泪も流すメコン川
- 2、人格も守れぬフランス資格無し カミュの怒りとカビル人
- 3、マクロンの正体見たりデラパージュ
- 4、フランスの本音が透ける無反応
- 5、すみません穏やかに言う幸せを
- 6、人に語るの言葉無し思いの重み抱き死す^{いだ}
- 7、東洋の心を生かせハマナスと野茨杏^{のいばら あんず} チューリップ

1、『愛人』の泪も流すメコン川

好きだったのでは?? 好きじゃなかった、とは言い切れなかったのでは?? 少なくとも、嫌いだなんて言い続けていたことは・・・。

月光の洋上、フレデリック・ショパンのワルツ第10番⁽¹⁾短調作品69-2を奏でるピアノの音が、サイゴンからフランスに向け航行する客船を包み込み、その響きはインド洋に撒布される。愛人との歴史が、砂漠に注がれた水のように、跡形も残さないまま、吸い込まれ、消えてしまう。十歳代半ばの少女は、海に流れるワルツに包まれ、泪に暮れる。

それから数十年。パリの書齋に籠もる彼女に電話がかかる。中国語のアクセントで、彼の声は震えていた。「彼は彼女を死ぬまで愛し続けるだろう (il l'aimerait jusqu'à sa mort)⁽²⁾」。

ジャン＝ジャック・アノー⁽³⁾監督による1992年の映画作品、『愛人 (ラマン)』のフィナーレを飾るシーンである。

シンガポール最大の新聞、ザ・ストレーツ・タイムズは、2017年2月15日付けで、「シンガポールでの制限指定映画上位10作品⁽⁴⁾」を紹介。その中で、この『愛人 (ラマン)』を第5位に取上げている。そこでは、1993年作品の『シンドラーのリスト』が第2位、1988年の『存在の耐えられない軽さ』も第8位とトップ10に選定されている。

しみつたれで自己中心的なことから悪名が高かった原作者のデュラスとの葛藤を乗り越え、ジャン＝ジャック・アノー監督が、1930年前後のインドシナを、コストを惜しまず、人手を掛けて繊細かつ忠実に再現した映像は美しい。また、作品の主人公は、フランス人少女と満州系華人青年ではあるが、往事の現地の人々の実情も切々と伝わってくる映画作品となっている。アノー監督は、この『愛人 (ラマン)』の5年後、1997年に『セブン・イヤーズ・イン・チベット⁽⁵⁾』を公開した。アイ

ガー初登頂で知られるオーストリアの登山家ハインリヒ・ハラーと若きグライ・ラマが、チベットで共に過ごした7年間の交流を描いたことで、中華人民共和国との関係が暫時ぎくしゃくしたことがあった。しかし、2015年には、中仏合作の『最後の狼（狼图腾）⁽⁶⁾』を完成させている。アノー監督は、葛藤錯綜する人間や国との関係を上手く乗り切る達人でもあるようだ。

さらに、今年（2022年）3月16日には、アノー監督による『パリ・ノートルダム寺院炎上⁽⁷⁾』のフランス封切りが予定されている。

ここで、冒頭の『愛人（ラマン）』のシーンに戻ってみよう。

船上で泣き濡れていた少女は仏領インドシナのサイゴン郊外で生まれ育ったフランス人。植民地インドシナを支配する白人とは言え、両親とも現地学校の教員で、フランス人社会の最下層に属し、その上、父親は彼女の就学時に早世した為、貧困に喘いでいる。残された母は、植民政府の役人に騙され、海水に浸食される地を稲作用の田んぼとして購入し、破産寸前にまで追い込まれた。金銭的にも逼迫した母子家庭の「貧しさ」がもたらす辛酸を、この少女は嘗めているのだ。

一方、フィナーレのシーンで、「死ぬまで愛し続ける」と言ってくれた彼は、フランス留学帰りのエレガンスを纏っている。サイゴン近郊チョロン（ショロン）での不動産経営で成功した満州系華人の跡取り息子として、豊かで怠惰な日々を過ごしている。ただ、彼には幼少時からの婚約者がいる。未だ、婚約者の顔すら見たことが無いとは言え、父母と同郷の彼女との結婚は絶対だった。フランス人と一緒になるのは論外という彼の父の考えは不動で、その結婚式が催行される。

描かれている少女のモデルは、原作者のマルグリット・デュラス自身であるかのように、デュラスは示唆している。サイゴン郊外のジャディンで1914年4月4日に生まれた彼女が、自らの15歳前後から、未だ見ぬフランスへ旅立つまでの少女時代を描いた作品が、『愛人（ラマン）』である。

ベストセラーとなり、彼女の悲願でもあったゴンクール賞に輝いた『愛人（ラマン）』であるが、時は既に1984年、彼女は70歳を迎えていた。1950年に上梓した『太平洋の防波堤』で、受賞確実との前評判にも拘わらず、ゴンクール賞を逸してから、34年後であった。

『愛人（ラマン）』の主人公である少女の言葉からも、人種差別的発言が随所に見受けられ、デュラス自身もフランス植民省の帝国広報担当であった時期もある。だが、『愛人（ラマン）』のバックグラウンドからは、植民国家だったフランスに不協和音を奏でざるを得ない、彼女の思いが滲み出ている。

アルジェリアの人々に武器を向けることを拒否する声明である、1960年9月6日の『アルジェリア戦争不服従権宣言⁽⁹⁾』の署名者にデュラスが加わってから30年近くが過ぎての、ゴンクール賞だった。

ちなみに、映画版の『愛人（ラマン）』のナレーションを担当しているのは、英語版と仏語版の双方とも、ジャンヌ・モローである。デュラスと馬が合っていた彼女は、母方の英語と父方の仏語の魅力を、そのナレーションで十二分に発揮している。そんなジャンヌ・モローがシャンソン歌手として1963年に出したアルバムを飾った曲が面白い。『薄れ行く記憶』と題して、恋人の名前も目の色もぼんやりとして思い出せない・・・と、とぼけて歌っている。曖昧な記憶が讃美された時代もあったのだ。そして、そんな薄れ行く記憶のメリットを再確認することが、これからの世界には必要なのでは、とも思わせる。

2、人格も守れぬフランス資格無し カミュの怒りとカビル人

アルベール・カミュは、1957年、史上二番目の若さでノーベル文学賞を受けた。それから2年2ヶ月後、1960年1月4日、カミュはミッシェル・ガリマールが運転するファセル・ヴェガ FV3B の助手席に座っていた。そのクーペがフランス・ヨンヌ県で国道5号線の鈴懸の並木に時速145キロで激突。カミュは46歳で即死している。その為もあってか、前項で取上げたマルギット・デュラスと同世代というのが余りピンと来ない。しかし、1913年11月7日がカミュの誕生日であり、デュラスより5ヶ月、先に生まれていただけのことになる。生誕地は、仏領アルジェリア北東端のモンドヴィ、今日のドレアンである。

彼の父親はフランス人のアルジェリア入植者の子息、母親はスペイン系子女で、いわゆる「黒い足（ピエ・ノワール）」と呼ばれる生い立ちであった。

小学校時代から苦学の連続だったものの、教師からの庇護もあり、1936年5月に、アルジェ大学を卒業。翌々年の1938年に、人民戦線の機関紙『アルジェ・レピュブリカン』の記者となった。

彼は初仕事の一つとして、彼自身が生まれた場所に程近いカビル地方でのフィールド・サーヴェイを選んだ。フェニキアやローマが勢力を伸ばした時代から、勇猛果敢で、独立心旺盛で有名だったカビル地方の民—カビル人—をルポしたのだ。その現地報告を『カビリの悲惨』⁽¹¹⁾と題して、『アルジェ・レピュブリカン』紙に連載したのは、1939年6月5日から15日にかけてであった。

アルジェリアの北東端近くの地中海を望む山塊の地、ギリシャを彷彿とさせる急峻なカビル地方に超過密状態を強いられ、押し込まれて暮らすカビル人の厳しい近況をカミュは詳細に報じている。

誇り高く独立心旺盛なカビル人が飢餓状態に苦しみながら「戦争の機会でもあれば、食べ物を得られるのに」と呟く姿、赤貧に喘ぐ人々の窮迫した様相、過密状態からもたらされる貧困、救済や教育施設の貧弱さの実態、等々が詳述されている。

カミュは、結論として、「若し、植民的征服が許されるとすれば、征服された人々がその人格を守り続けることを、征服した側が支援できる限りに於いてのみである」と喝破した。⁽¹²⁾

「進歩」と「文明化」を標榜する植民地化でありながら、現地の人々の人格を守ることに出来ぬ実態を糾弾したのだ。

カビル人の中には、その置かれた状況の厳しさから、フランス本国などに移住した人々も少なくない。サッカーの選手・監督としてファンの多いジネディーヌ・ヤジッド・ジダン、両親ともカビル人であり、誇り高いカビル人の模範として挙げられることも多い。また、マスコミ嫌いである女優のイザベル・ヤスミン・アジャーニの父親はコンスタンティヌ生まれのカビル人元仏軍兵士である。

アルベール・カミュは、この時期に前後して、ジャーナリズムの倫理や報道の自由についての論考を発表しているが、1940年には記事の発禁処分もあり、パリに移らざるを得なかった。そして、ドイツの侵攻を避けて、クレルモン・フェランからリヨンへと転々としたのである。

3、マクロンの正体見たりデラパーージュ

「マクロンのデラパーージュ（横滑り）」と第一面に大見出しを掲げ、マクロン大統領の発言を報じたのは、2021年10月3日付けのアルジェリアの『エル・ワタン（祖国）』紙である。⁽¹³⁾マクロンの発言

に対し、アルジェリアは、即刻、パリ駐在大使を召還し、フランス軍用機のアルジェリア上空通過禁止措置が取られた。

デラパージュと聞けば、日本のスキーヤーにはお馴染みだ。スキーを横滑りさせながら滑る方法で、体力を消耗しないで、スキーの摩擦を活用しながらスピードコントロールができる安全な滑り方である。フランス語での、本来の意味からすれば、本筋を離れ、横道にずれてしまったような「失言」を指すことが多い。

2021年9月30日、エリゼ宮で、マクロン大統領は若者たちと昼食を共にした。地中海を挟むアルジェリアとフランス両国から、アルジェリア戦争に拘った人々の第3世代18名を招いたのである。⁽¹⁴⁾ 若者18名は、この6月からアルジェリア戦争に関するストラ報告の研究を共に続けており、報告者のバンジャマン・ストラ自身も同席していた。

若者たちとの歓談中のことで、流布している情報が公式に記録されたものではないものの、マクロン大統領の話は、次のような内容であったと報じられている。

- ① アルジェリアの公的歴史は、フランスへの怨恨に依拠、真実に基づかないで、完全に書き換えられている。⁽¹⁶⁾
- ② アルジェリア戦争後（1962年以降）のアルジェリア国家は、問題はすべてフランスの所為にして、「記憶の収益（rente mémorielle）」の上に構築されている。⁽¹⁷⁾
- ③ 質問としてではあるが、フランスによる植民地化に先だってアルジェリアの国民国家（nation）が存在していたのか？ 先行する国々の植民地だったのではないのか？⁽¹⁸⁾

「フランスへの怨恨（haine）」への言及については、アルジェで育った少女が「アルジェリアの若者はフランスへの恨みを抱いていない」とコメントしたが、マクロン大統領は、アルジェリア社会についてではなく、アルジェリアの底流にある政治軍事システムは硬化かつ疲弊しており、「記憶の収益」に依拠していると、①と②を合わせたような回答をしたようである。⁽¹⁹⁾

「レント」とは、家賃（レント/Rent）を滞納し、クリスマスイヴにもかかわらず電気も暖房も止められてしまう若者たちを主人公にした、ジョナサン・ラーソンのミュージカルのタイトルとして、日本でも知られている。

マクロン大統領は、レント（ラント/rente）という単語を、年金配分とか家賃収入の類いの不労所得として捉え、アルジェリアが過去の記憶遺産をネタにした収益に依存していると言いたかったのであろう。しかし、その根拠もさることながら、そのような理解の仕方をしてること自体が、アルジェリアとフランスの双方に不快の念を生じさせるものであった。右傾化が顕著とも世論調査で伝えられる大統領選を数ヶ月後に控えた思惑と焦りが感じられる対応ではあるが、少々、フランスの本音が見え透いた感を覚えさせるものではある。

また、アルジェリアの現状を正視すれば、記憶のレントに依存しているかのような分析は、少々時代遅れでもある。⁽²⁰⁾

マクロン大統領の「記憶のレント」との発言に対し、アルジェリアのラマムラ外務大臣が「マクロン大統領の記憶の破綻」⁽²¹⁾と応酬し、外交上の空白状態が3ヶ月続⁽²²⁾いてしまった。

マクロン大統領が若者たちに、質問として出した③の国民国家としてのアルジェリア（La

nation algérienne) の存在有無は、歓談中での質問としても、学術的課題としても、難問に過ぎ、不適切と考えられる。むしろ、マクロン大統領自身から模範解答を示して、若者たちに添削をしてもらった方が有益で興味深い気がする。

サヴォア地方が加わる30年以前の1830年にアルジェを占領したフランス自体が国民国家(nation)と言えたのか？ 仮に、当時のフランスが国民国家であったとしても、そうでないところを併合する資格はあるのか？ 国民国家がそんなに素晴らしい理想を体现できるのか？ デメリットもあるのでは？ と、質問の連鎖になってしまうのではないだろうか。更には、国民国家(nation/État-Nation)として、アルジェリアをフランスに併合し、フランス語を国語として押しつけ、多くの人々の母語を黙殺した歴史的事実を正当なものだと確信している裏側も見てとれる。

また、「先行する他国の植民地 (précédentes colonisations) だったのでは」との指摘については、マグレブ地域において、フェニキアがカルタゴに進出した折からの勢力下にあった時代、ローマが支配力を強めた時代、あるいは16世紀頃からのオスマン帝国に組み入れられた時代の歴史を勘案しても、フランスの植民地政策を正当化するような結論は得られないと思われる。

確かに、植民地や奴隷は古今東西を問わず存在し、英仏等の訪米だけが植民地での搾取や奴隷貿易を行ったのではないと言った反論は、散見される。

しかし、産業革命以降の西欧の植民地政策は、従来のものとは分業についての考え方、また規模に於いても大きく変化している。

フランスの植民地政策の基本は、分割統治にあり、宗教、民族等の分断対立を煽り、文明文化の連続性を阻害し、破断させた罪は大きい。

植民国家が、現地の教育の面で貢献したことは評価される部分はあるものの、欠陥も多かったことは否めない。個々の教師たちの貢献振りは、1項で取上げた『愛人 (ラマン)』での描写からも伺え、2項で取上げたアルベール・カミュが教育を受け続けられた過程から垣間見える。しかし、それらの例をもってしても、植民地政策を正当化するには問題が残る。

基礎教育の目的の一つは、植民国家側でも、植民地側でも、工業化・産業化に有用な人的資源の養成にあった。そんな中で、『愛人 (ラマン)』の主人公である少女の母が、生徒が将来、労働契約で不利益を被らないようにと、少なくとも契約の文言は読解できるよう、自宅で徹夜させても生徒たちの勉学を督励するような姿は感激させるものがある。また、アルベール・カミュのノーベル文学賞授賞式の際のスピーチが捧げられた恩師の逸話も美しい。そのような教育者が少なくなかったことには救われる。

オスマン帝国の時代を理想化する必要は無いものの、イスラム教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒が共生共存し、相互の尊敬と敬愛を、安寧に保持できていたのは確かであろう。

人類史上、最も長命の国民国家とも目されるエジプト、あるいはイスラム教徒、ユダヤ教徒、キリスト教徒のすべてにとって聖地と見做されているエルサレム等の歴史を振り返っても、オスマン帝国時代の統治が優れていたとされる面から学ぶべき点もあると思われる。また、イギリスやフランスの介入後との、客観的な比較が必要なのではなからうか。ただ、エジプトに関する研究は、比較可能な資料が少ないことから困難を極めるとも聞いている。⁽²³⁾

「幽霊の正体見たり枯れ尾花」ではなく、「マクロンの正体見たりデラパージュ (横滑り)」である。

4、フランスの本音が透ける無反応

「植民地化はフランスの歴史の一部をなしており、これは人道に背く犯罪⁽²⁴⁾である。我々は、この行為を犯したことにしてお詫びをし、正面から相対峙しなければならぬ⁽²⁵⁾」。

これは、エマニュエル・マクロンが未だ大統領選に向けての一候補者であった2017年2月15日、大統領に選出される3ヶ月前に、アルジェリアのテレビ放送を通じて述べた言葉である。アルジェリアを始めとした国々を植民地化 (colonisation) した歴史的事実を、人道に対する罪と断定し、謝罪 (excuses) をする、との内容を含むもので、フランス内外に反響を呼んだ。

その大統領選に勝利した彼は、2017年5月14日に大統領に就任、フランスの植民地だった国々での期待が高まった。しかし、マクロン大統領のその歴史認識について、フランス国内の懸念と支持の相克にも、深いものがあつたのであろう。間もなく5年の任期満了と改選を控えて、マクロン大統領の言動は慎重なものにとどまったままである。

フランス軍の拷問により殺害されたモーリス・オーダン／アルジェ大学助手 (数学) の夫人に2018年謝罪、カビル人系のアリ・ブメンジェル弁護士殺害についての仏軍の関与を2021年3月になって認知し謝罪、フランス軍に協力したアルジェリア人兵士 (アルキ) の処遇や保護政策に問題があつたことについて今秋 (2021年) に謝罪したことが特筆される位である。過去のフランスの大統領が候補者時代よりも積極的になった傾向と逆方向に動いている。もっとも、大統領就任当初は、「第三世界主義者^{tiers-mondiste}」を標榜していた左派出身のミッテランが、後に軌道修正した経緯と似ている。

フランスが植民地政策をとった過去については、オスマン帝国の時代を引き合いに出しトルコの怒りを買うといったように、フランスの右傾化⁽²⁶⁾に同調した言動⁽²⁷⁾も目立っている。

候補者当時は積極的に言及していたフランスによる植民化に対するお詫びについては、逆に否定的になっているようだ。アルジェリアのアブドゥルマジード・タブーン大統領が「130年にわたるフランス統治下で犯された犯罪を認めておらず、反省が無い⁽²⁸⁾」との報道にも無反応を続けた。

雄弁を以て有名なマクロン大統領だけに、改選を前に、彼の無言が際だっている。

マクロン大統領は、昨年 (2021) 年7月下旬にフレンチ・ポリネシアを訪問した際も、核実験の後遺症等について、負い目があることは認めたが、詫びることは拒否した⁽²⁹⁾。

5年前には、「右でもなく、左でもなく」と是々非々の新しい中道路線を標榜したマクロンであるが、大統領に就任後は右寄りに舵を切り、中道右派と評価されるようになった。今年 (2022年) 4月10日に予定されている第1回目の投票を控え、共和党のヴァレリー・ペクレス候補や国民連合のル・ペン候補の倍近くの支持を現職のマクロン大統領が得ている。⁽³⁰⁾とは言え、マクロンが中道右派、ペクレスの共和党は伝統的な右派、ル・ペンの国民連合は国民戦線から党名変更をただけで実質は内向き思考の極右であり、いずれも右である。更に極右のゼンムールは浅薄なメディア露出は顕著だが、アルジェリアやマグレブ諸国との対立を煽る視野狭窄な論調ばかりで、右傾化^{droitisation}が顕著なフランスの大統領選となっている。パリのアンヌ・イダルゴ市長のような国際派穏健路線は支持を拡げられず、中道左派から左側は萎縮した狭隘な議論ばかりに終始、蜻蛉壺の中の百家争鳴が続いている。

5、すみません穏やかに言う幸せを

マクロン大統領は、一昨年（2020年）7月、『アルジェリアの植民地化と戦争に関する記憶問題についての報告』⁽³²⁾を、バンジャマン・ストラ元パリ第 XIII 大学教授に依頼した。その報告は、昨年初頭に提出されている。

しかしながら、報告の内容は新鮮味に欠ける。折角の歴史と記憶の問題に正面から取り組む機会であるにも拘らず、「歴史家が歴史家同士の間にも留まらず、大衆に向けて・・・どこまで、記憶、許し、和解について立法できるのか？」と、諦めムードが滲み出ている。以降、3頁程にわたり、謝罪の是非について、日本による謝罪の先例を否定的に紹介し、次のように結論している。

アジアに回り道をしてみると、20世紀に於ける、日本、中国、韓国の関係は、謝罪が表明されているにも拘わらず（中略）⁽³³⁾、靖国神社参拝の問題を始めとして、韓国と中国の間での歴史と記憶を巡る問題の再燃は続き、日本の謝罪は中国、韓国の輿論から何うと偽善のように受け止められている。従って、「謝罪政策」は両国の怨恨を全く鎮静させていないことは明白である。

しかしながら、この検証で日本の謝罪が全く役立っていないかの如き結論を導き出しているのは短絡的と言えよう。日本の謝罪は他の国々にも、そして国内にも向けられたものであり、また関係者の多くも謝罪で一件落着と考えている筈もない。またいずれの場合をとっても、謝罪と同時に有益な提案も出され、それなりの成果を挙げているからである。加えて、若い人々に於いても、歴史を振り返り、また様々な人々やドキュメンタリー等の記憶を通じて反芻する良い機会になっているように思われる。

ここで、1995（平成7）年8月15日に、『戦後50周年の終戦記念日にあたって』⁽³⁴⁾として公表された、いわゆる村山談話の一部を再読して見よう。日本の温かなイメージ形成に寄与し、内外に一服の清涼感をもたらした効果が蘇ることを願いたい。（下線筆者）

平和で豊かな日本となった今日、私たちはややもすればこの平和の尊さ、有難さを忘れがちになります。私たちは過去のあやまちを2度と繰り返すことのないよう、戦争の悲惨さを若い世代に語り伝えていかなければなりません。とくに近隣諸国の人々と手を携えて、アジア太平洋地域ひいては世界の平和を確かなものとしていくためには、なによりも、これらの諸国との間に深い理解と信頼にもとづいた関係を培っていくことが不可欠と考えます。政府は、この考えにもとづき、特に近現代における日本と近隣アジア諸国との関係にかかわる歴史研究を支援し、各国との交流の飛躍的な拡大をはかるために、この2つを柱とした平和友好交流事業を展開しております。また、現在取り組んでいる戦後処理問題についても、わが国とこれらの国々との信頼関係を一層強化するため、私は、ひき続き誠実に対応してまいります。

いま、戦後50周年の節目に当たり、われわれが銘記すべきことは、来し方を訪ねて歴史の教訓に学び、未来を望んで、人類社会の平和と繁栄への道を誤らないことであります。

わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に誤り無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫び

の気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます。

敗戦の日から50周年を迎えた今日、わが国は、深い反省に立ち、独善的なナショナリズムを排し、責任ある国際社会の一員として国際協調を促進し、それを通じて、平和の理念と民主主義とを押し広げていかなければなりません。同時に、わが国は、唯一の被爆国としての体験を踏まえて、核兵器の究極の廃絶を目指し、核不拡散体制の強化など、国際的な軍縮を積極的に推進していくことが肝要であります。これこそ、過去に対するつぐないとなり、犠牲となられた方々の御霊を鎮めるゆえんとなると、私は信じております。

このように、再読してみると、日本の威信を傷つけることなく、素直に歴史から教訓を学び、世界の場で生かそうという覚悟が伝わって来るのではないだろうか。

特に、歴史研究の支援、各国との交流の拡大、戦後処理問題への誠実な対応等の対処方針も建設的なものであり、その方向での努力が今後も続けられれば、日本や世界の前進に寄与するものと期待される。

アルジェリア戦争後の、フランスは、アルジェリアのことは「忘れてしまいたい」との趨勢が顕著で、1960年代から80年代にかけて、歴史研究の空白状態が続いていた。続く1990年代になると、refus de repentance coloniale ⁽³⁵⁾ progrès mission civilisatrice 「植民地主義への反省を拒否」し、「進歩」と「文明化の使命」を標榜したフランスの植民地政策を礼賛強調する層が台頭している。そんな層では、標榜された政策が果たした負の側面や現地の実情の検証はそっちのけである。進歩が望ましいことなのか、文化の連続性が大切なものではないか、文明化とは植民地化した先方の文明を無視した破壊行為では無かったのか、振り返って考え直す必要がある。特に、アフリカでは、進歩の名の下にフランスが課した、強制労働と移住の後遺症がもたらした悲惨さには胸が痛む。非人間であるばかりでなく、本国国内でのみ「自由」を強調しながら、植民地では人々の自由を篡奪し、平等と博愛は顧みられていない。

そんな流れと比較すれば、日本の戦後における歴史研究は、「忘れない」世情にも拘わらず、誠実な実績を積み重ねて来たことは評価されるべきと思われる。

各国との交流の拡大についても、メディアが人々の記憶を記録し、刺激し、多くの人々の記憶の触媒として果たす役割は大きく、日本の実績は着実で、今後のメディア技術革新により、更に成果を挙げられるものと期待される。

アルジェリア戦争はトランジスター・ラジオの時代で人々は音による聴覚イメージで戦況を識り、一方ヴェトナム戦争はテレビの普及と共に、強烈な映像による視聴覚イメージで現場に接するようになった。ただ、米英仏が主導してきた映像によるイメージ形成だが、日本はその独自性と技術力で健闘して来ている。日本が映像メディア面での国際交流で貢献して来たことは、もっと評価されてしかるべきと思われる。今では、アジアの国々のメディア力が世界をリードする面も多い。

日本のお詫びは、決して揶揄されるようなものではない。

街中で人に軽く触れただけでも、「すみません」とか、「ごめんなさい」とか、あやまりの言葉を素直に表現する日本。勿論、「てめえ、俺の〇〇に触れやがって」と、強面の人も居なくは無いが、^{こわおもて}そんな場合にも、さりげなく、優しく、「失礼しました」などと言える日本は、中々乙なものでは無からうか。

そして、日本の中だけで無く、世界中、何処に行っても、そんな「乙な姿勢」を保てば良いので

ある。「そんな甘いことを言っていると、謝ることをしないヨーロッパでは、つけ込まれて」と反論する人もいるが。けれど、日本の中であっても、強面に強面に対応すると、つまり乙な態度で応じなければ、乙で済まなくなるのは同様である。古今東西、己の姿勢は乙に貫徹するのが最良なのだ。

6、人に語るの言葉無し思いの重み^{いだ}抱き死す

「これを語る言葉はない」⁽³⁶⁾との、ジェラルド・ドパルデューのナレーションでの独白は、「言うことではない」と続く。

ベルギーのベルヴォー監督による2020年秋に公開された『男たち』^{Des hommes⁽³⁷⁾}で、原作はロラン・モヴィニエである。

後にアルジェリア戦争と名付けられる出来事が、未だ事件とか事変とか、呼ばれていた1960年、フランスの山中で育った素晴らしい青年ベルナールが兵役で招集を受け、アルジェリアに派遣される。そこでの凄惨な、筆舌に尽くしがたい経験が、彼に言葉を失わせてしまう。「こんなことをする連中って何なのだ。こんなことをするのは人間じゃない。だけれども。人間（男）なのだ。」⁽³⁸⁾

更に、「戦わされている敵側が本来の居場所なのでは」、「アルジェリアを解放するために戦闘を続けている側にいるべきなのでは」、「自分は間違っただけ側にいるのでは」、と反芻を重ねる。錯綜した思いが彼を苛む。[彼がアルジェリア人だったら、間違いなく、フェラーガ^{f e l l a g a}になっていた]⁽³⁹⁾筈なのだ。フェラーガとは、1952年から62年にかけて、フランスに抗して立ち上がった、マグレブ地方の戦士たちだ。

28ヶ月に及んだ兵役から解放され、故郷に帰る。ベルナールは、無口で、しかし、時には暴力的で、危険視されるような男に、様変わりしていた。

最早、ベルナールとの名前では呼ばれず、「薪の火」^{Feu-de-Bois}と字を付けられ、村人からは怪物のように忌避される。

そんなベルナールも、招集される以前の1950年代には、やがては自動車修理工となって、美しい恋人のミレイユと一緒にいることを夢見る好青年であったのに。

このベルヴォー監督の『男たち』^{Des hommes}は2020年の第73回カンヌ映画祭に公式選奨^{Sélection officielle}されていた。しかし、当初2020年5月12日から23日にかけてカンヌで開催される予定であった映画祭が、コロナ禍で中止となった為、注目を浴びる機会を逸してしまった感がある。

ベルヴォー監督は、この映画の制作に先立って、アルジェリア戦争関係者の第3世代である20歳代の若者たちに、アルジェリア戦争から生還した人が、家庭でどのような話をしたかを訊ねたそう。彼等の祖父や大叔父たちは、一様に無口で何も話さず、亡くなった後で、彼等の歴史を辿り直したものの何も無かったことで共通していたとのことである。⁽⁴⁰⁾

映画はフィクションではあるが、現場の生き証人たちが、口にも出来ず、書き記し伝えることも出来なかったが、しかし抹殺されてはならない、本当の歴史と真実を掘り起こす切っ掛けとなってくれる可能性を秘めている。⁽⁴¹⁾

私事にわたるが、父も、陸軍航空隊の100式司令部偵察機の操縦桿を握っていて撃墜されたものの、一命を取り止めている。それを罪悪でもあるかのように生きる姿は重々しかった。その背景について、祖母から若干は教えられたが、父本人は口を閉ざしたまま何も語ろうとしなかった。ポツダム中尉として27歳で除隊となる以前の、戦時中の日々は謎ばかりで、自分は何も知らないことが実感される。

子供の頃、数少ない生き残りの同僚の方から教えられたことが、今では希少な情報として記憶に残っているばかりとなった。聴きそびれた空白の重さに、愕然とすることが余りにも多い。飛行機に乗った時の、耳鳴りを止める方法だけが、父が教えてくれた唯一の遺産となっている。

人に語るの言葉無し思いの重み抱き死す

7、東洋の心を生かせハマナスと野茨杏^{のいばらあんず} チューリップ

「親愛なるムラタ

なかなか連絡出来ずにごめんなさい。私もセヴィも元気です。シモーヌはまだ巴里だと思いますが、元気でいて欲しいと祈っています。

ムハンマドとオットーは出征しました。二人とも自分から出ていったのよ。

ムハンマドは、ある将軍に心酔して、自ら志願して彼のもとへ行ってしまったのです。

唯一の慰めは、独逸軍と土耳其軍が友好的、味方と呼び合える関係にあるということです。私(ディクソン夫人)はここでは敵国人なので、⁽⁴²⁾(後略)」

梨木香歩さんの『村田エフェンディ^{たいとろく}滞土録』の中の一節である。ここでは、第一次世界大戦の前夜から大戦初頭にかけての情景が的確に、敵味方に偏することなく、静かに描写されている。オスマン帝国の首都、東西交流の要であるスタンプル(イスタンブール/コンスタンティノープル)を舞台に、考古学に勤しむ日本からの研究生、村田エフェンディを始めとした、ドイツ、ギリシャ、トルコの若者たちの織りなす交遊録が心地良い。エフェンディとは、「〇〇先生」と、少々は学のある人に呼びかける際の敬称に近い感じである。

この『村田エフェンディ^{たいとろく}滞土録』の背景と、ほぼ同じ頃の時代、オスマンからの独立を目指すアラブの反乱運動を率いた、イギリス陸軍将校のトマス・エドワード・ロレンスの活躍を描いた雄大な映画に『アラビアのロレンス』がある。アラビア半島に広がる砂漠の苛酷さ、美しさ、清潔さ、そこで闘う男たちの姿が壮麗な画面に映し出される。今から60年も前、1962年の作品にもかかわらず、古さを全く感じさせない。勿論、そこには最新のデジタル再生技術の進歩の御陰もあるが、今もなお、最も偉大で影響力のあった映画の一つに挙げられるのも納得させられる。1963年、オスカー賞10部門にノミネートされ、7部門で賞を獲得した作品だけのことはある。

しかし、感激的なシーンばかりではない。

ヒジャーズ鉄道や道路交通の交差する要衝の地ダルアーへ、ロレンスは敵情偵察に出掛ける。心配する友人のアリに、地元の服装を着込んだロレンスは、「自分は透明人間だから大丈夫」と、ナルシスト的な強気を示す。しかし、町を支配するオスマン帝国軍の手に落ち、ロレンスは徹底的にいたぶられ、鞭打たれ、街中に放り出される。

凄惨で、残酷なシーンが続き、ロレンスが打ちのめされて、精神的にも再起不能近くになる姿が

映し出される。結果、ロレンスは前線を離脱し、カイロへ戻る。

ロレンスと情動的に一体化した視聴者は、ただ敵軍の一部による残虐な行為を憎むだけに留まらず、オスマン帝国そのものが悪辣非道であるかのような錯覚を抱き、その錯覚の記憶が刷り込まれてしまう可能性がある。まるで、そのような残虐な行為はイギリス側では無いかのように。

最も偉大で影響力のあったとされる映画の、一つのシーンが影響を及ぼす残影は、オスマン帝国の正しいイメージ形成を妨げているのかも知れない。

しかし、英雄的に映し出されるロレンスを本当に打ちのめしたのは、イギリスそのものなのだ。

ロレンスが理想として描き、イギリスが約束するかのように見せかけたアラブの独立。独立闘争あるいは第一次世界大戦の勝利の暁には、独立が待っているかのようなフサイン・マクマホン協定。その一方で、イギリスは、オスマン帝国領だった中東を英仏露の3カ国で分割支配することを約束するサイクス・ピコ協定を締結。イギリスは、更に、パレスチナへのユダヤ人居住についてのバルフォア宣言を出している。いわゆるイギリスの三枚舌外交を展開し、今に続く、中東の混乱と悲劇の根幹を根付かせてしまった。

オスマン帝国内のクルド州を独立させクルド人の故国を創る夢を砕いたローザンヌ条約が残した悲劇、パレスチナでの紛争、サイクス・ピコ協定に怒りを抱くイスラム国、等々の諸問題。中東では、一世紀前からの後遺症は未だ癒えていない。イギリスやフランス、ロシアの責任は大きい。

欧州では、大戦と言え、第一次世界大戦のことであり、100余年を経た今もなお、その頃の心の傷は癒えていないように見受けられる。

特に、敗者側となったオスマンを始めとして、そのオスマンと連携したドイツとオーストリア、ハンガリーは、その傷を、第二次世界大戦にまで持ち越して重症化させ、その深手に苦しむこととなった。

第一次世界大戦で、ドイツは本国の周辺だけでなく、青島、山東省、南洋諸島を日本に接収され、タンガニーカをイギリスに押さえられ、失っている。

ちなみに、2021年のノーベル文学賞はザンジバル生まれで英国在住のアブドゥルラザク・グルナに授与されたが、彼が2020年に出版した『Afterlives』⁽⁴³⁾は、ドイツ統治下のタンガニーカで起きたマイマイ（マウマウ）の反乱の凄惨な光景を活写している。しかし、そんなドイツの植民地を継承したイギリスのタンガニーカやケニアの統治が、どのようなものであったのかは忘却されてはならない。

第二次世界大戦の敗戦で、更に、国土の約4分の1を失ったドイツは、失われた国土からの自国民の受入れだけでなく、勝者側の国々から追立てられた同胞の苛酷な引揚げに苦闘せざるを得なかった。故国に辿り着くまでに引揚げ者全体の半数に及ぶ数百万人の命が、略奪、暴行、飢餓で失われている。

^{la mémoire de la Shoah(44)}
ショアの記憶への認知が世界的に共有されるようになると共に、加害者としてのドイツにのみ焦点が当てられて来た。

そんな中で、被害者としてのドイツが秘めて来た記憶が、ようやく、明るみに出されようとしている。しかし、同時に、ポーランド、ギリシャからも、戦後補償の問題が再提起され、ドイツ内外の記憶と歴史的事実の検証は、ますます、厳しいものになりつつある。

人々のイメージ形成で看過できないメディアとして漫画がある。フランスのル・モンド紙が20世紀を振り返って、レコード、映画、書籍の3媒体で各々最も優れた100の作品を選定したことがある。⁽⁴⁵⁾フナック書店員やル・モンド記者があらかじめ選んだ各部門200作品の中から、フランス人1万7千名に「記憶に残った作品は？」と訊ねた結果だそうだ。

内、書籍部門では、1位にカミュの『異邦人』、2位にプルーストの『失われた時を求めて』、3位にカフカの『審判』と並んだが、途中は割愛するとして、18位にエルジェの漫画である『Le Lotus bleu青い蓮』が選ばれ、19位はアンネ・フランクの『日記』であった。

100冊の書籍に選ばれた中の漫画としてはトップとなった『青い蓮』は、エルジェの24巻に上った『タンタンの冒険』シリーズの第5巻目であり、取り分け『青い蓮』が何故取上げられたのかが興味深い。既に、2億3千万冊を超える出版部数を誇る人気シリーズだけに、その影響力は無視できない。

日本軍の秘密諜報部員である実業家ミツヒラト（中国語版名：平野松成）がオーナーを務める上海の阿片窟『青い蓮（藍蓮花／藍蓮花）』を中心に話は展開される。阿片密売や汚い手を使う日本軍の植民活動。それと対抗して立ち上がる中国の地元の人々を支援する少年タンタンの活躍を描いた作品である。また、ベルギー人のエルジェは、ベルギー領コンゴでのタンタンの活躍を英雄的に描いていたが、『青い蓮』は、植民地政策を批判的に描いた最初の作品となった。特に、満州事変の初期から、中国側に立ったエルジェの旗色鮮明さが、欧米や中国で再評価されている。

一昨年（2020年）1月、オークションに掛けられた『青い蓮』の表紙画に、4億円超の落札価格がついた。⁽⁴⁶⁾昨年（2021年）8月から10月にかけて、上海で開催された、『タンタンとエルジェ展』⁽⁴⁷⁾は、盛況を博した。タンタンは、上海の英雄なのだ。

タンタンの活躍に夢中になる子供たち（大人も含め）が、ベルギー領コンゴでの植民地政策は文明化の使命を遂行し、日本のそれは阿片の密売で収奪を目指していただけのように錯覚しないことを願いたい。

とは言え、阿片でアジアを毒した西欧列強を正々堂々と正せるように、日本の犯した「まぎれもない侵略行為」⁽⁴⁸⁾に対し、自らの襟を正す為にも、「痛切な反省の意」と「心からのお詫びの気持ち」を抱き続けることが肝要だ。

『青い蓮』でタンタンが活躍する世界は、フィクションはフィクションであるが、映画や漫画、文学等が目覚めさせる記憶を、どのように方向付けるかは、重要な課題である。

例示的に、オスマン、ドイツ、日本を、今もなお劣位に置くことが多いメディアの伝える内容を紹介してみたが、氾濫する情報の中で、どのような情報を選択検証して行くかの姿勢が大切であろう。

コロナ禍で逼塞した国際関係の中で、国境を巡る様々な記憶が呼び覚まされ、新たな葛藤が甦ろうとしている。

加えて、急速に革新が進むメディア環境が、多くの人々や国々の様々な記憶を表出させ、それらの総合的な検証が可能となっている。

しかし、依然として、大戦の敗者側はメディア戦でも劣勢に立たされているのは否めない。オス

マンを継承したトルコは、イスラム圏の中では、映像や音楽に寛容なほうではあるが、それでもメディア環境としては厳しいものがある。

また、多様で鮮明な記憶が、世界の対立や抗争を煽動するだけに終始するとしたら情けないことであろう。

ジャンヌ・モローが1963年に出したシャンソン『^{J'ai la mémoire qui flanche}薄れ行く記憶』の話に冒頭部分で触れた。記憶が、本当にうっすらと、ぼんやりして行くのかどうかはともかく、薄れ行く記憶の魅力もあるようだ。

日本は、第一次世界大戦では戦勝国側で、第二次世界大戦では敗戦国となったユニークな国だ。第二次世界大戦では敗戦したものの、ドイツの失った国土の広さとその痛みに思いを馳せると、痛みを分かち合いながら果たすべき日本の責務は大きいと感じられる。

日本は極東の地にあり、中庸を重んずる国である。東洋の良さが、体感として理解できる国でもある。

例えば、マクロン大統領が「冒涇の権利」、「誹謗中傷する自由」をイスラム圏に行って滔々と述べる姿を見ながら、別に異義を挟む訳ではないが、何となく違和感を覚える人が多いのではないかと思われる。イスラムには、イスラムの素晴らしさもあるのではと、素朴な疑問を抱いたりする。

世界で果たすべき、日本の役割は大きいと期待される。

素朴な疑問は素朴なままに、うっすらとした記憶はうっすらとしたままに。

網走の原生花園に咲くハマナスも美しいが、イギリスの西端、コーンウォール地方のポースカーノに持ち込まれたハマナスは元気に湾岸を覆い、白浜を鮮やかなピンクで彩っている。

19世紀から20世紀にかけて、大英帝国の情報通信を支えた海底ケーブル網の中核だったポースカーノ、往事の勢いを伝える^{Telegraph Museum}電信博物館も今は^{Museum of Global Communications}グローバル・コミュニケーションズ博物館と名称は変わっているが、周囲のハマナスは、変わりなく元気で、ますます繁茂している。

日本のハマナスや野苺^{のいばら}（野薔薇）、中国の杏の花、トルコのチューリップ^{のばら}・・・・が、今では、世界中で愛されているように、東洋の良さが世界で重んじられるように務める日本の役割は大きいと思われる。

なお、脚注に付したウェブ等の参照日時は、特に記載の無い限り、2022年1月11日22:00JST 現在のものである。

- (1) マルグリット・デュラスは、このショパンの「ワルツ第10番 ロ短調作品69-2」を、後の作品で La Valse Désespérée (絶望のワルツ) と呼んでいる。
cf. Marguerite Duras ; L'Amant de La Chine du Nord, Editions Gallimard, p.21, Paris, 1991.
- (2) Marguerite Duras ; L'Amant, Les Editions de Minuit, p.142, Paris, 1984.
- (3) Jean-Jacques Annaud
- (4) Top 10 R-rated films in Singapore, The Straits Times (海峡時報), February 15, 2017.

- <https://www.straitstimes.com/lifestyle/entertainment/top-10-r-rated-films-in-singapore>
- (5) Jean-Jacques Annaud ; Seven Years in Tibet, 1997.
- (6) Jean-Jacques Annaud ; Le Dernier Loup (狼图腾), coécrit avec John Collee, 2015.
- (7) Une bande annonce impressionnante pour “Notre-Dame Brûle” de Jean-Jacques Annaud
https://www.huffingtonpost.fr/entry/une-bande-annonce-impressionnante-pour-notre-dame-brule-de-jean-jacques-annauda_fr_61bb8b4ae4b0bf370338534c
- (8) <https://www.parismatch.com/Culture/Livres/Marguerite-Duras-l-amant-retrouve-546366>
- (9) Le Manifeste des 121 ; Déclaration sur le droit à l’insoumission dans la guerre d’Algérie, in le magazine Vérité-Liberté, 6 septembre 1960.
<https://pandor.u-bourgogne.fr/archives-en-ligne/ark:/62246/r32021zzbmvq3k/f202>
- (10) Jeanne Moreau ; J’ai la mémoire qui flanche, 1963).
 “Quel pouvait être son prénom/Et quel était son nom/Il s’appelait, je l’appelais, (...)Comment l’appelait-t’on?”
 “De quel couleur étaient ses yeux ?”.
- (11) Albert Camus ; Misère de la Kabylie, -Reportages réalisés du 5 au 15 juin 1939, le quotidien Alger-Républicain.
- (12) Car, si la conquête coloniale pouvait jamais trouver une excuse, c’est dans la mesure où elle aide les peuples conquis à garder leur personnalité.
- (13) Madjid Akedhi ; Le dérapage d’Emmanuel Macron, 03 Octobre 2021, El Watan.
<https://www.elwatan.com/edition/actualite/le-derapage-demmanuel-macron-03-10-2021>
- (14) Quand Emmanuel Macron rencontre les “petits-enfants” de la guerre d’Algérie et provoque la colère d’Alger
<https://information.tv5monde.com/info/quand-emmanuel-macron-rencontre-les-petits-enfants-de-la-guerre-d-algerie-et-provoque-la-colere>
- (15) Benjamin Stora ; Rapport sur les questions mémorielles portant sur la colonisation, et la guerre d’Algérie, janvier 2021, 157pp.
- (16) “Emmanuel Macron dénonce, en Algérie, une “histoire officielle” selon lui “totalement réécrite qui ne s’appuie pas sur des vérités” mais sur “un discours qui, repose sur une haine de la France”.
<https://information.tv5monde.com/info/quand-emmanuel-macron-rencontre-les-petits-enfants-de-la-guerre-d-algerie-et-provoque-la-colere>
 “Le président algérien a exigé de Paris ce dimanche “un respect total de l’Etat algérien”, soulignant à l’adresse d’Emmanuel Macron que “l’histoire ne peut pas être falsifiée”
https://www.bfmtv.com/international/apres-que-macron-ait-parle-de-rente-memorielles-alger-reclame-le-respect-total_AN-202110110027.html
<https://www.faz.net/aktuell/politik/ausland/macrons-kritik-an-algerien-schuldzuweisungen-17567887.html>
- (17) “La nation algérienne post-1962 s’est construite sur une rente mémorielle, et qui dit : tout le problème, c’est la France.”

(*ibid.*)

- (18) “Est-ce qu’il y avait une nation algérienne avant la colonisation française ? Ça, c’est la question », s’est interrogé le président français, en rappelant qu’il y a eu « de précédentes colonisations ».”
<https://www.challenge.ma/apres-les-propos-de-macron-sur-le-systeme-politico-militaire-algerien-lalgerie-rappelle-son-ambassadeur-a-paris-222335/>
- (19) “Répondant à une jeune femme ayant grandi à Alger qui lui explique que la jeunesse algérienne n’a pas de “haine” envers la France, Emmanuel Macron explique : “Je ne parle pas de la société algérienne dans ses profondeurs mais du système politico-militaire qui s’est construit sur cette rente mémorielle.””
<https://www.challenge.ma/apres-les-propos-de-macron-sur-le-systeme-politico-militaire-algerien-lalgerie-rappelle-son-ambassadeur-a-paris-222335/>
- (20) James McDougall; A History of Algeria, Cambridge University Press, April 2017, 448pp.
<https://www.middleeasteye.net/fr/entretiens/algerie-france-james-mcdougall-memoire-histoire-colonisation-macron-nation>
- (21) “Il a appelé à la décolonisation des esprits en France et la « faillite mémorielle » que représentent les propos de Macron sur l’Algérie, le Mali et la colonisation.”
<https://www.tsa-algerie.dz/algerie-france-lamamra-repond-a-macron/>
- (22) https://www.francetvinfo.fr/monde/afrique/algerie/l-ambassadeur-algerien-de-retour-a-paris-un-signe-d-apaisement-avec-la-france_4905577.html
- (23) *cf.* Alain Roussillon, Identité et modernité. Les voyageurs égyptiens au Japon (xixe-xxe siècles), Paris-Arles, Sindbad-Actes Sud, 2005, 252 pp.
- (24) <https://www.leprogres.fr/politique/2021/10/07/france-algerie-quelles-pistes-pour-une-sortie-de-crise>
- (25) “La colonisation fait partie de l’histoire française, poursuit-il. C’est un crime, c’est un crime contre l’humanité, c’est une vraie barbarie. Et ça fait partie de ce passé que nous devons regarder en face, en présentant nos excuses à l’égard de celles et ceux envers lesquels nous avons commis ces gestes.”
https://www.lemonde.fr/election-presidentielle-2017/article/2017/02/16/pour-macron-la-colonisation-fut-un-crime-contre-l-humanite_5080621_4854003.html
- (26) “Après s’être interrogé sur l’existence d’une « nation algérienne », le président avait ainsi ajouté : « Moi, je suis fasciné de voir la capacité qu’a la Turquie à faire totalement oublier le rôle qu’elle a joué en Algérie et la domination qu’elle a exercée ».”
<https://www.radiotelecaribes.com/apres-que-macron-a-parle-de-rente-memorielle-alger-reclame-le-respect-total/>
- (27) https://www.lopinion.ma/France-Algerie-Rente-electorale-VS-Rente-memorielle_a19269.html
- (28) “Le président Tebboune a rappelé qu’Alger ne réclame « pas de la repentance » mais une « reconnaissance » des crimes perpétrés en 130 ans de colonisation française.”
<https://www.radiotelecaribes.com/apres-que-macron-a-parle-de-rente-memorielle-alger-reclame-le-respect-total/>
https://www.francetvinfo.fr/monde/afrique/algerie/algerie-le-president-algerien-exige-de-paris-le-respect-total-de-l-etat-algerien_4803143.html

- (29) https://www.lemonde.fr/politique/article/2021/07/28/essais-nucleaires-en-polynesie-macron-reconnait-une-dette-mais-ne-presente-pas-d-excuses-au-nom-de-la-france_6089777_823448.html
- (30) Thomas Piketty ; Emmanuel Macron porte une responsabilité écrasante dans la droitisation du paysage politique, 8 janvier 2022, Le Monde.
https://www.lemonde.fr/election-presidentielle-2022/article/2022/01/05/presidentielle-2022-emmerder-les-non-vaccines-l-operation-calculée-du-quasi-candidat-macron_6108332_6059010.html
- (31) <https://www.lefigaro.fr/elections/presidentielles/presidentielle-2022-emmanuel-macron-donne-largement-en-tete-loin-devant-peccresse-et-le-pen-20220105>
- (32) Benjamin Stora ; Rapport sur les questions mémorielles portant sur la colonisation, et la guerre d'Algérie, janvier 2021, 158pp.
<https://www.elysee.fr/admin/upload/default/0001/09/0586b6b0ef1c2fc2540589c6d56a1ae63a65d97c.pdf>
- (33) “Car si l'on fait un détour par l'Asie sur les relations entre le Japon, la Chine et la Corée au XXe siècle, on sait que des excuses ont été pourtant prononcées...”
(op. cit.) p.79.
- (34) https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/danwa/07/dmu_0815.html
- (35) Pierre Bourdieu, Abdelmalek Sayad ; Le déracinement. La crise de l'agriculture traditionnelle en Algérie, Paris, Ed de Minuit, juin 1964. 等、少数の例外はあるが。
- (36) “Il n'y a pas de mots pour raconter tout ça”
<https://www.franceinter.fr/cinema/des-hommes-de-lucas-belvaux-une-adaptation-trop-fidele-au-livre-de-laurent-mauvignier>
- (37) Lucas Belvaux ; Des hommes, adaptation du roman Des hommes de Laurent Mauvignier.
- (38) “Quels sont les hommes qui peuvent faire ça. Pas des hommes qui peuvent faire ça. Et pourtant. Des hommes.”
 Télérama n° 3111, 29 août 2009.
- (39) “S'il était algérien, sans doute il serait fellaga”
www.lexpress.fr/culture/livre/laurent-mauvignier-les-hommes-dans-la-guerre-d-algerie_788268.html
- (40) “il ne racontait rien, on a reconstitué son histoire après sa mort”
 Benjamin Stora; *op.cit.*, p.73.
- (41) <https://www.lalibre.be/culture/cinema/2021/09/01/des-hommes-lucas-belvaux-denoue-les-fils-de-la-memoire-traumatique-de-la-guerre-dalgerie-5ZMBXVPYIVFADPXC6BR53VDLYE/>
- (42) 梨木香歩 ; 村田エフエンディ滞土録、2004, 角川書店、角川文庫版、pp.222-223, 2007, 240pp..
- (43) Marie Béloeil ; Vu d'Allemagne. Abdulrazak Gurnah, Prix Nobel de littérature, jette la lumière sur l'histoire coloniale allemande, Courrier international du 08/10/2021.
<https://www.courrierinternational.com/revue-de-presse/vu-dallemagne-abdulrazak-gurnah-prix-nobel-de-litterature-jette-la-lumiere-sur>
<https://www.ft.com/content/ea00fcd9-22e0-4e1b-b4f0-0b2e47652ef7>

- (44) Pascal BLANCHARD, Isabelle VEYRAT-MASSON ; Les guerres de mémoires : un objet d'étude ? in Revue de Sciences humaines, #09 | 2009.
<https://journals.openedition.org/traces/4319>
- (45) Cent disques, cent films et cent livres pour un siècle, Le Monde, 15 octobre 1999.
https://www.lemonde.fr/archives/article/1999/10/15/cent-disques-cent-films-et-cent-livres-pour-un-siecle_3570803_1819218.html
- (46) “Tintin cover art sells for record-breaking €3.2m”
<https://www.theguardian.com/books/2021/jan/14/tintin-cover-art-sells-26m-just-missing-record-comic-book-sale-le-lotus-bleu-herge>
- (47) Exposition : Tintin et Hergé
<https://www.tintin.com/fr/news/5653/exposition-tintin-et-herge>
https://www.lemonde.fr/international/article/2021/09/28/la-chine-connaissait-tintin-elle-decouvre-desormais-herge-grace-a-une-exposition-a-shanghai_6096221_3210.html
- (48) 中曾根康弘；まぎれもない侵略行為、in 戦後70年 につぼんの記憶、橋本五郎編 読売新聞取材班著、中央公論新社、pp.376-381、2015年12月、391pp..